

F-21 家政学の体系確立と家政哲学Ⅱ、Ⅴ社会家政学の哲学的考察

耶山女大家政 ○影山弥 関口富左 須田秀幸 高館作夫 真船均

目的 家政学が人間守護の学であると定義される場合、その中核的な哲学的含意は、家庭というものが可能性として、また部分的にしろ実際的にもつ愛情信頼感が現代人の人間性喪失という精神病態をいやしうる最大の可能性をもつという洞察にある。だから現代家政学の今日的重要性と今日の妥当性はこの点にこそあるという指摘はいくら強調してもしすぎることはないともいえる。しかし他面、現代の家庭において、それが本来的に有すべきこうした非合理的感情は、社会的レベルで横溢する外々しい人間関係の影響によって、希薄化し、形骸化しつつある傾向をしめしているようにも思える。またこのことは家庭の人間関係が社会的状況の反映という側面をもつことを意味している。

かくして家の守護性の確保のためにはどうしても社会レベルでの守護状況の創造という家庭内発的課題が生まれてくる。すなわち、社会家政学への要請である。今回の発表はこのような社会家政学の必要性の論拠と研究課題について若干の考察を試みようとするものである。

方法 文献研究による。

成果 1)家政学は対象領域として社会的事物をも包摂しうる開放体系でなければならぬこと、2)家庭の守護性を補強するためには自発性と価値の共有を基盤とするコミュニティを創造する必要があること、3)かくして、社会家政学中心テーマはコミュニティ創造である。